



BRIGA COMUNICA

SAN TOMMASO

聖トマーズ教会

聖トマーズ教会を公にしたのはカルロ・ニグラ氏(Carlo Nigra)であった。彼は1917-1918年に教会の短い基本的な公文書を作成し、その上この教会を擁護し、ピエモンテ州の監督局から必要な修復作業権を取り付け、それで(教会の)建物とその中に保管されていた絵画を救出した。

修復は短期間でなされた。まだ残っていた屋根の部分は取り壊され、全体の外壁が再建され、周りの壁が補強され、腕木は取り除かれ、フレスコ画の不順物が取り除かれ、打ち固めた土で床の高さが整えられた。さらに教区の古文書館の記録から解るようにニグラ氏によって古い扉に代って新しいより堅固な扉が造られ、懺悔する神々の像が据え付けられた。

続いて、だが何時も同じ最初の修復区画内で、建設中の北東の角と他の部分に下壁が塗られ、鉄製の鎖が設置され、そして後陣のアーチ風の枠組が修復され、正面の斜面に抑制の利いた壁が造られた。

(19)30年代には礼拝堂の調査がおこなわれ、ノバーラ地方のロマネスク建築に精通しているパオロ・ヴェルゾーネ氏によって、図で解説された。1971年、教区司祭ドン・マリーノ・ピッフェロ氏の時代、(ピエモンテ州の)監督官フランコ・マツィーニ氏が、フレスコ画で埋め尽くした全ての表面を予め固定させ、絵画を修復させ、漆喰を樹脂で固定させ、カビや酸化物を除去させ、化学的手法で塩分除去が行われ、絵画の補強を行った。最近の教区司祭ドン・ピーノ・サッコ氏の10年間の間に新たな改良がなされた:1918年代の崩れかかった壁が再建され、信者に返却された寺へのアクセツ方法が改善された:

内部の打ち固められた土の床に石の床が敷かれた。教会に大理石の一枚岩で造られた新しい祭壇が寄贈された

聖トマーズの度重なる出現は昔は実際には外国人に、一般的にはドイツ人に、限られていた;ある年1965年8月に、兄弟の聖人ジュリオ氏とジュリアーノ氏の生れたギリシャの島エジーナ島から一団が教会を訪れた。しか次第に我が国の研究者たちが(教会の)フレスコ画に関わり始めた。

だんだんとそれについてマッティローロ氏が1937年に、ガブリェッラ女史が1944年に、バローニ氏が1952年に、そして他の人々が、ついには1976年はキエリチ氏が、ディ・ジョヴァンニ女史が1980年に(語りだした)。

このディ・ジョヴァンニ女史の最近(=最後)の話は、その歴史についてであれ、ブリーガ市の記念碑の絵画遺産についてであれ、この建築物を完全に分析し、以前の書き物を理路整然と解説したものであった。他の研究者たちは特殊な面と単に好奇心な面を強調しただけであった。

その歴史については私は既にお話し致しました。フレスコ画に—これがブリーガ市のロマネスク様式の多様性を示すの最も興味深い面を形成しておりますが—たどり着く前に、ヴェルゾーニ氏が上手く記述しておりますが、若干の指摘をしておくことが有効かと思えます。建物は(異教の)小さな神殿の上に建てられ、半円形の後陣を一つ備えたただ一つの部屋からなっております。身廊には天井は無く、(礼拝堂の)後陣は壁性の半円形のドームで覆われています。

正面は掘立小屋形式です、その中に一枚岩の新しい屋根を配置するために、1918年に行われた増築の跡が明らかに見いだせます。現在の唯一の入り口の上に一連の一塊りのアーキ・トレーブ(梁部)が見えます、つまりアーチ型に配置されたレンガの枠組みを持った石の後光を備えた半月窓の形のドーム天井が。上には扉に垂直に、内部を照らす透間が美しい眺めを形作っています。外に向かっては絶えず、つまりニグラ氏に先立つ古い修復の跡(橋の穴)が見えます。

正面を眺める人々の右側の側面には壁で塞がれた扉と明かり取りのついた二つの窓を見ることが出来ます:

反対側の壁面には1918年に倒された鐘楼の跡と馬車の古い入り口を思わせるような大きなアーチの跡が見えます。後陣には二つの明かり取り風の透間、上には明かり用のもう一つの透間(が見られます)。

(教会)建設の可能な日付の確定には、鑑定人(=専門家)の家系が様々ですが、全員が一致しているのは現在我々が見ているような教会が建てられたのは1千年(Mille)頃に違いないという点です。ニグラ氏はそれを前世紀の終わりに位置付けています。そして彼と同じ意見で"Donna d'Oldenico(オルデニコの婦人)"を見出すでしょう；書いた人が控え目ながら同意している日付に、他の人たちが11世紀と主張しています； ヴェルゾーニ氏は1025-1050年を、
ディ・ジョヴァンニ女史はアーチは1000年-1025年と。

古い教会の中に入りましょう。内部は掘立小屋風の屋根に覆われているように見えます。見る人の注意を直ちに引き付けるのは後陣と福音者のシンボルの間にいるイエス、処女マリア、使徒たち、鳩、天使たちと聖Diacomoを描いた勝利のアーチであります。

ディ・ジョヴァンニ女史の確定した日付に従うのが相応しいでしょう、彼女は1971年の修復後の絵を調査しました。つまりそこではキリストが水盤の中でアーモンド形の装飾の中で暗赤色で縁取られ、緑とレンガのような赤いマント姿で顔が大きく引き伸ばされて閉じ込められています。その同じ後陣の水盤の中で、キリストの右側に一匹の雄牛(聖ルカのシンボル)が驚き眺めています；その反対側からは一匹のライオン(もう一人の福音者マルコを表現)

水盤について：

オット大帝時代の芸術に頻繁に現れるモチーフ、幾何学的なモチーフの装飾。キエリチ氏にとってはアルプスの彼方のロマネスク建築に好まれる装飾芸術に頻繁に描かれる表現が問題となりうるのでしょう。

後陣の円柱の中でマドンナと聖人達との長い列。9人の人物。マドンナは聖人たちと同じように立ったまま司祭姿で現れ、ビザンチン娘たちの短いベール、マフォリオンを頭に被っています；
一祈るマドンナのポーズは一ガブリエッリ女史は主張します一原始キリスト教自身のものであると。

一人の聖人が彼女に一つの鍵を差し出しているようです。それは脇の書物に読みふけているような聖ピエトロです：聖ピエトロは白いトゥニカの上に、庶民の伝統からは天国の番人と考えられている紅いマントを羽おっています。全ての人物は、ディ・ジョヴァンニ女史が書いているように、ほとんど眼が無いような見開いた眼、重い睫毛、重苦しい表情、
尖った細い鼻、頬と赤い頬骨の跡のある頬骨、狭い額をしています。

勝利のアーチの上部に赤、緑そして白いギリシャ女性が現れ、白を背景にして一羽の雌の鳩のいる円形画を囲んでいます、その両側に翼を広げた紅いマントで覆われた白い服の二人の天使がいます。この点について、
聖トマーズ教会の絵について幾つかの判断に言及する心算です。

ガブリエッリ女史。ブリーガ市のフレスコ画のサイクルはロマネスク絵画の歴史の中では等閑出来ない位置を示している。その特徴、染み風の筆さばき、分解的な色合いが旨く定義されている、例え我々が知っているとしてもだ、中世の芸術家たちは顔つきをもとに戻したり、衣服を描く方法を示した学術書を思いのままに出来、靈感を得るモデルたちを覗き見るみことができたということ。

アルド・モレット。ブリーガ・ノヴァレーゼ市の聖トマーズ教会の使徒たちはパラティーノの狭いサークル(=仲間?)の介入から離れてオット大帝時代の絵画の中の"バルバロ"山(=傾斜地)の場所を知るために鍵を提供している...
ブリーガ・ノヴァレーゼ市の後陣のように出口を分析する必要がある時、不適切にならないように、これらの芸術家を非歴史的に決めつけないように：

ところで聖トマーズ教会のフレスコ画は誰が描いたのだろうか？ ビヤンキ氏：

ブリーガ市のフレスコ画はそのスタイルの一貫性で人の心を打つ：大変有能な極めて洗練された同じ一人の画家によって完全に描かれたか、あるいは少なくとも一人の大変有能で極めて洗練した師に率いられた画家のグループによって描かれた。使徒たちの衣装の様々な細部は修道士・画家によってブリーガ市のフレスコ画は描かれたという推測を価値あらしめるものである。

何時絵は描かれたのであろうか？ガブリエッリ女史にとっては、1020年頃そしてその世紀の終わりを超えるものではない。この点には多かれ少なかれ全員一致しています。大抵の人々はXI世紀の前半に傾いています。